● 読書感想文コンクール　中学生の部 ●

優秀賞

圓岡　優来（まるおか　ゆら）　楢原中 3 年生

作品名：人魚の眠る家

図書：人魚の眠る家

　ある日突然、愛する人が目を覚ますことがなくなったら。夏の暑い日、娘の瑞穂ちゃんはプールで溺れ、心肺停止で病院に運ばれた。医師からは「おそらく脳死」と告げられた。この話は、残酷な現実を叩きつけられた、狂気と愛情に満ちた母親の話だ。
　脳死とは、心臓は動いているが、脳は死んでいるという状態のことをいう。日本は、おそらく脳死だろうと思われる場合に、臓器提供の話をする。そして、それを承諾したときに限り脳死判定を行い、脳死と判断する。それから臓器提供が行われる。
　私は脳死がこの世で一番残酷だと思う。排泄もするし、髪だって伸びる。脳死でも、皆と同じように日々成長していく。脳死の状態で数年生きることもあれば、数日しか生きられないこともある。ただ眠っているようにしか見えないのに、二度と目を開けることがなく、生きているのに死んでいるからだ。
　この母親は脳死の娘を、臓器提供ではなく、科学技術を駆使して手足を動かし、顔の表情を変えるなど、様々な方法で三年間を共に過ごした。
　そんな母親を私は、ただの自己満足だと思う。日本には、ドナーを待っている人がたくさんいて、その中でも子供のドナーが現れることは極めて少ない。自分のためだけに、娘を生かすのではなく、ドナーを待っている人たちのために臓器提供をするべきだと思ったからだ。
　私は、臓器移植を待っている側、そして臓器提供を選択する側の気持ちになって考えてみた。
　私が臓器移植を待っている身だとしたら、ドナーが現れるのを心待ちにするのだけは、やめようと思った。ドナーが現れるということは、どこかで誰かが亡くなるということで、悲しむ人がたくさんいるに違いないからだ。そして、脳死を受け入れられず、臓器提供をしないで、看病を続ける人たちのことを悪く言わないと思っ

た。
　なぜなら、私が臓器提供を選択する身だとしたら、この母親と同じようにすると思うからだ。受け入れられずに、臓器提供はしないで、愛する人と一緒にいるためだったら、どんなことでもする。結局私も母親と同じで、自己満足になるだろう。だが、自己満足で何が悪い。周りが死んでいると思っても、私が生きていると思う限り、生き続ける。周りに何と言われようが、周りの人を納得することはなく、周りの人が私を納得することも無い。自分が思う道を進んでいいと思う。
　この母親が言った「この世には狂ってでも守らなきゃいけないものがある。そして、子供のために狂えるのは母親だけなの」という言葉を聞き、胸が熱くなった。私は初め、この母親を自己満足だと思ったが、誰に何を言われても自分が思う道を進み、狂ってでも娘のために尽くしている姿は、自己満足でも何でもなく、真っ直ぐでかっこいい母親だと思う。
　おそらく脳死だと告げられてから三年がたったある日、突然瑞穂ちゃんの体調が急変し、危機的状況に陥った。いつ心臓が止まってもおかしくない状態で、母親は臓器提供を承諾した。そして、いくつかの臓器を摘出し、移植された。
　私は、臓器提供を選択する身になったらしないと思うが、もし私が脳死した時には、臓器提供をしてほしい。それをすることで、たとえ私がいなくなっても、私の体の一部はこの世界で生き続けられ、私の体を誰かの役に立てたいからだ。そのために臓器提供について家族と話し合い、臓器提供意思表示カードを持ちたいと思う。
　私は「人魚の眠る家」の題名に込められた意味を考えてみた。人魚は人ともとられるし、魚ともとられる。瑞穂は生きてるともとられるし、死んでるともとられる。人魚は陸には上がれない。瑞穂は意識を取り戻せない。題名に込められた本当の意味はわからないが、「人魚の眠る家」は、物語の全てが込められた題名だと思う。
　この物語は、脳死は人の死か、心臓死が人の死か、人間の死とは何かという、答えが出ることのない問いを、重く深く考えさせられる物語だ。そして、命がどれだけ大切で、明日が来ることは当たり前ではないと感じ、一日一日を大切に、懸命に生きようと思えた。